天草版伊曽保物語の語彙の変化の考察

A study of vocabulary changes in the Amakusa edition of Esopono Fabvlas

古川　紘一郎
Koichiro Furukawa

はじめに

天草版伊曽保物語とは、今から428年前、1593(文禄２）年九州熊本の耶蘇会（イエズス会）天草学林に於いて刊行された羅馬字（ローマ字）綴の日本文“イソップ物語”を新村出氏の手によって漢字仮名交じり文（国字）に翻刻したものである。[1)]

少年時代に誰しも読む「イソップ物語」は、古いギリシャの話の本であるが、この本が天正時代(1573～1591年）に日本にもたらされて、「平家物語」の抄訳本と共にキリスト教の布教用にローマ字の日本語で初めて印刷出版されたのは、1593(文禄２）年で、場所は天草のキリシタンのコレジオ(学院）であった。現在は大英博物館に一部ずつだけ保存されているという天草本は、日本における貴重な本である。[2)]

天草に宣教師養成を目的としたコレジオ（大神学校）が1591(天正19）年から1597(慶長２）年までに設置された、それは最高学府（大学）で「天草学林」と呼んでいる。ここで天草版と呼ばれる数多くの活版印刷が行われた。[3)]

「平家物語」(1592 年刊行)「伊曽保物語」(1593年刊行)、「ラテン・ポルトガル・日対訳辞典（1595年刊行）などは特に貴重なもので、世界の文化遺産となっている。

この「伊曽保物語」はローマ字綴りの日本文イソップ物語を漢字仮名交じり文に翻刻された口語日本語の資料として重要なものである。[4)]

研究方法

この天草版伊曽保物語に書かれている語句を一つ一つ取り出し、その語句がどのようなものなのか分析を試みようと考えた。天草版伊曽保物語で使われている語句の中で、日常使われている生活語彙は大半理解できる。しかし、作品には一般に使用されていない難解な語句が出てくる。その難解な語句をいくつか取り出して語彙の変化を考察してみたい。

結果と考察

天草版伊曽保物語の語彙の変化の研究～天草版伊曽保物語に使用されている語彙～

天草版伊曽保物語の使用されている名詞

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、名詞の総数は1358を数えた。

今から428年前にできた天草版伊曽保物語の中でも、使用されている言葉は日本語であるから現代でも共通するのは当然なのだが、古典の作品であるから難解な語句が出てくる。例えば、あ行の言葉をあげれば作品の中に、愛、相手、秋、商い、医者、馬、臆病等、言語としては生活の基本語彙であり、現代でも使われている。しかし、例えば、朝腹、荒武者、衣冠、叡覧、佞人等は現代では使われていない言語である。

天草版伊曽保物語の中で使用されている名詞の1358語の全てをあげたいが、紙面の都合であ段の213語を記す。

あ（51）

愛　相手　仰せ　暁　上がり　秋　商い　悪　悪逆　悪事　芥　悪人　顎（あご）
麻　朝腹　足　足元　明日（あした）　明日（あす）　汗　辺り　仇（あた）　仇（あだ）
暖まり　辺り　暑さ　天晴　後　跡式　穴　余　天　草　余り　網　雨　誤り　争い
荒武者　蟻　有り無し　蟻虫　哀れ　哀れみ　庵　案　安堵　案内　安穏　安否
安楽

い（78）

井　家　家路　井川　衣冠　勢い　行き来　憤り　異形　戦　池　井桁　生け捕り
異見　以後　威光　石　医者　衣装　威勢　以前　異相　磯端　鼬（いたち）　市
一朝　一石（いっこく）　一円　一決　一期　一跡　一奏　一族　一段　一同
一把　一倍　一分　一味　一門　一夜　一類　一家　一巻　一曲　一向　一紙
一旦　一杯　一編　一本　逸物　偽り　糸　医道　威徳　暇（いとま）　暇乞い
否　居直り　田舎　蝗　古　犬　犬子　猪　命　今　今明日　以来　入り口　色
色香　巌（いわお）　謂れ　慇懃　因縁　悪戯者（いたずらもの）

う（15）

飢え　上　植木　憂世　牛　疑い　現（うつつ）　器物　馬　馬屋　海端　海辺　恨み
憂い　運

え（17）

絵　柄　餌（え）　栄華　叡感　叡覧　叡慮　益　餌　枝　枝葉　越度　獲物　縁
炎天　遠慮　依怙（えこ）

お（52）

尾　王　王位　王業　黄金　往返　大風　狼　大酒　仰せ　大勢　丘　犯し　置き所
奥　億　臆病　臆病者　贈り物　怠り　尾先　教え　押領　夫　音　尾長鳥

女子（おなご）　斧　各々　己　尾羽　御参り　御祝　御方　思い　思い定め　重さ
重荷　佞人（おもねにん）　趣　折節　押領　終わり　恩　音曲　恩賞
音声（おんじょう）　温湯

以上があ段の言葉であるが、天草版伊曽保物語の中で使用されている語句は、８割は現在でもわかる言葉で書かれているといえる。中には現代では使われなくなった難解語句がある。

例えば[あ]の「仇」では　天草版→「あだ」＝恨みを返すべき相手。
変化後→「かたき」＝（敵）遊び相手や競争相手。
「蟻」では　天草版→「ありあし」＝昆虫。あり。
変化後→「あり」＝蟻。
[い]の「磯端」では　天草版→「いそばた」＝磯のほとり。
変化後→「かいがん」＝（海岸）海辺。うみばた。
[お]の「佞人」では　天草版→「おもねにん」＝きげんを取って相手に気に入られようとする。へつらう。媚びる。
変化後→「ねいじん」＝媚びへつらう人。よこしまな人。

このように、なぜ使われなくなったかは、時代の流れと共に、その時代に合ったわかりやすい語句へと変化していったのである。

ここで天草版伊曽保物語の中で使用されている名詞の語句の中で、現代では使われていない難解語句を取り出すと、おおよそ次の通りである。

あ行　・朝腹　・荒武者　・衣冠　・異形　・叡感　・叡覧　・叡慮
・越度　・佞人（おもねにん）　・音声（おんじょう）
か行　・貝吹　・学匠　・蝸牛（かたつぶり）　・唐物　・緩怠　・貝鉦　・眼耳鼻舌
・飢渇　・后（きさき）　・義兵　・弓箭　・御意　・教化　・驕慢　・金子
・銀子（ぎんす）　・禁中　・気逆い　・苦患　・究竟　・薬師　・件
・轡　・公界　・下女・下知　・下人　・検断　・権柄　・権門　・高家
・高座　・頭　・小姓　・袞竜（こんりゅう）　・五体
さ行　・才幹　・雑餉　・讒言（ざんげん）　・肉叢（ししむら）　・従人　・守護　・証跡
・上臈（じょうろう）　・所司代　・人体　・宿老　・所従　・崇敬　・関守　・関屋
・僉議　・宣旨　・借状　・生々世々　・束帯　・讒者（そんしゃ）
た行　・知音（ちいん）　・調儀　・勅札　・勅使　・勅諚　・勅命　・沈酔　・知分
・天勅　・天道　・田夫　・天魔　・当時　・読誦（どくじゅ）　・蚌（どぶがい）
な行　・難艱　・ねごれ　・能芸　・農人
は行　・波旬　・譜代　・武辺者　・武略　・返弁　・炎（ほむら）　・本義　・犯人（ぼんにん）
ま行　・未生　・水屑　・水裾　・無道人　・目弾き　・問訊

や行　・夜前（やぜん）　・病目（やもめ）　・夕さり　・弓懸　・指金（ゆびがね）　・四大
ら行　・利剣　・聊爾（りょうじ）　・牢舎　・狼藉
わ行　・綰げ（わか）　・わやく　・童部（わらんび）　・分け分

天草版伊曽保物語に使用されている動詞

天草版伊曽保物語に使用されている語彙の中で、動詞の総数は762をを数えた。紙面の都合であ段の170語を記す。

あ（40）

会う　合う　仰ぐ　赤める　崇める　明らめる　挙がる　上がる　開ける　上げる
嘲る　欺く　預かる　預け置く　預ける　遊ぶ　与える　温まる　暖まる　当たる
集まる　集める　あてがう　当てる　侮る　余る　怪しむ　過つ　誤る　争う　改める
表す　現れる　有り合う　有る　歩く　合わせる　慌てる　哀れむ　案じる

い（37）

居合う　言い合う　言い負わせる　言い付ける　言い開く　言う　癒える　怒る
行き会う　生きて返える　憤る　生きる　往く　行く　生け捕る　生ける　勇む
諌める　致す　頂く　射立てる　痛む　痛める　至る　いちぎる　出でる　営む
居直る　嘶（いば）える　嘶く　戒める　嫌がる　卑しめる　居る　入れ置く
入れ立てる　入れる

う（25）

飢える　植える　窺う　浮く　承る　受ける　動く　失う　嘯吹（うそぶ）く　歌う
疑う　打ち殺す　打つ　移す　訴える　打って出る　映る　疎む　奪い取る　奪う
生まれる　埋める　敬う　恨む　羨む

え（２）

得る　刳（えぐ）る

お（66）

追い入れる　追い掛ける　追い下す　追い出す　追い付く　老いる　追う　負う　応じる
仰せ付ける　仰せる　犯す　起きる　置く　臆する　送る　贈る　怠る　行う　起こる
怒る　驕る　押さえる　収める　修める　教える　惜しがる　恐れる　押し止める
押し取る　おじゃる　おぢゃる　押す　押しよせる　怖（お）める　落ちる　追っ掛ける
落とす　訪れる　劣る　踊る　衰える　驚かす　驚く　戦く　怯える　脅す　覚える
思しい　溺れる　お目に掛ける　思い当たる　思い切る　思い定める　思い切る　思い寄る
思う　赴く　泳ぐ　及ぶ　おりゃる　おる　折る　終わる　訪う　生い出る

以上があ段の言葉であるが、主として事物の動作・作用・存在を表す語句で、あ段で見ても難解な動詞の言葉はそう多くないといえる。読みづらい難解な語句を除けば、ほぼ意味もわかる。

動詞の言葉で現代では使用度が少ない語句を取り出すとおおよそ次の通りである。

いちぎる　嘶（いば）える　おじゃる　おぢゃる　怖（お）める　おりゃる　食む
跼（くぐま）る　拉（くだ）く　拉（くだ）ける　黒める　御座る　如（し）く
跼（せぐくま）る　窄（す）べる　箱（す）げる　撓（たわめ）る　ちぎる　ぢだめく
つぼう　どしめく　とちめく　舐（ねぶ）る　被（かず）く　ひそめく　びちたく
目弾きする　綰（わ）ぐ　綰（わが）げる　蟠（わだかま）る

事物の動作・作用・存在を表す語句、つまり動詞の言葉のうち使用度の少ない語句として次の言葉を考察する。

「おじゃる」と「おぢゃる」について

一つ目は、「お出（い）である」の変化したもの。近世では「おじゃる」の表記が普通となる。

「来る」「行く」「居る」の意の尊敬語である。

二つ目は、補助動詞として用いられた。

「ある」の意の丁寧語として、「ござりまする」「ございます」

以上二つあるが、天草版伊曽保物語の場合は、二つ目の補助動詞として使われている。

「どしめく」と「とちめく」について

「どしめく」は、大きな音をたてる。大声でどなり散らす。騒ぎ立てるの意。

「とちめく」は、慌て騒ぐ。うろたえるの意。

「めく」は、どちらも接尾語である。どちらの動詞の語句も、意味に大差はなく使用されていた。

天草版伊曽保物語に使用されている形容詞

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、形容詞の総数は、91を数えた。

あ行（24）

浅い　浅ましい　悪しい　新しい　甘い　危うし　怪しい　痛い　いとおしい
いみじい　卑しい　疎い　疎ましい　嬉しい　多い　大きい　惜しい　落ち難い
同じ　夥（おびただ）しい　思しい　覚束（おぼつか）ない　重い　面白い

か行（18）

輝かしい　賢い　固い　難い　忝（かたじけな）い　悲しい　軽い　汚い　きつい
厳しい　口惜しい　苦しい　黒い　詳しい　気高い　小軽い（小は接頭語）　心安い
怖い

さ行（5）

親しい　少ない　鋭い　是非ない　狭い

た行（15）

高い　正しい　楽しい　頼もしい　易い　猛（たけ）い　猛（たけだけ）しい

小さい　近い　恙（つつが）ない　強い　辛い　遠い　疾（と）し　乏しい

な行（7）

無い　嘆かしい　嘆く　生暖かい　馴れ馴れしい　憎い　望ましい

は行（9）

激しい　早い　低い　久しい　等しい　広い　深い　古い　欲しい

ま行（6）

拙い　見苦しい　みちれない　醜い　難しい　空しい

や行（6）

安い　易い　床しい　由々しい　良い　弱い

わ行（1）

弁（わきま）え難（がた）い

以上形容詞については、事物の性質・状態を表す言葉である。人間の心情の変化については、どんなに時代が変わろうとも、現代においても心情を表す言葉の意味の変化はない。

天草版伊曽保物語に使用されている形容動詞

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、形容動詞の総数は、50を数えた。

あ行（10）

明らかに　余りに　哀れに　如何様　些（いささ）か　色々に　愈（いよいよ）

大きに　穏やか　疎（おろそ）かな

か行（5）

過分の　奇妙な　器用に　種々（くさぐさ）に　けんもほろろに

さ行（9）

盛んな　散々に　頻りに　静かに　強（したた）かに　上々の　直ぐに　速やか

澄やかに

た行（5）

平らか　高らかに　確か　確かに　妙（たえ）な

な行（4）

和やか　滑らかに　俄に　懇（ねんご）ろに

は行（7）

華やか　遥かに　密かに　美麗な　不器量な　不思議な　ほしいまま

ま行（4）

稀に　見事に　妙な　無果報な

や行（2）

豊か　悠々たり

ら行（２）

理不尽に　歴々

わ行（２）

僅か　わやく

形容動詞については、形容詞と同じく事物の性質や状態を表す言葉で、活用面で動詞的である点が違う。心情を表す言葉の意味の変化はない。

天草版伊曽保物語に使用されている代名詞

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、代名詞の総数は、34を数えた。

人称代名詞では（15）

私　我が　誰　方　そなた　こなた　御　辺　己　面々　某　汝　奴（やつ）

父御　そいつ

指示代名詞では（19）

あれ　いずく　いずれ　かう　かしこ　かの　ここ　こち　この　此の　これ

そこ　そち　その　それ　どこ　何　そ　どち

代名詞については、人称代名詞の某（なにがし）について、古くは自称の人称代名詞で男性がへりくだっていう語であった。「おのれ」とか「それがし」と使った。次に「奴（やつ）」については、古くは「やっこ」「家っ子」の意。古く、家に所属して使役された者。下男。他に「父御（ちちご）」については、（主に他人の）父の敬称。尊父。ててご。

天草版伊曽保物語に使用されている助動詞

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、助動詞の総数は、24を数えた。

助動詞

（推量）　うず（推量）　ごとし（比較）　さう（様態）　如（し）く　ず（否定）　ずる

ずれた（過去）　だ（断定）　たれ　ぢゃ　つ　な（断定）　なり（断定）　なれ

ぬ（否定）　べき（可能）　まい　まじ（打消の推量）　まじい　るる（受身）

るれ（受身）　たい（希望）　まらする

＊「まらする」については、連用形は「まらせ」よりも「まらし」が多用され、活用はサ変となった。「まっする」ともいい、それを経て「まっす」更に助動詞「ます」が成立した。

室町期には盛んに用いられたが、近世には廃れ、元禄（1688～1704）期の奴詞（やっことば）などに例が見られるくらいである。

天草版伊曽保物語に使用されている助詞

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、助詞の総数は、40を数えた。

格助詞（８）

が　の　を　に　へ　と　より　から

接続助詞（11）

ば　とも　ども　を　て　でも　も　で　をも　とて　ながら

係助詞（３）

は　も　こそ

副助詞（９）

さへ（さえ）　ぞ　など　ほど　まで　ばし　ばかり　づつ　のみ

終助詞（９）

か　かし　そ　ぞ　たら　な　よ　ばや　かな

接続助詞「に」+ 係助詞「は」

格助詞「を」+ 係助詞「は」

＊「ばし（副助詞）」については「はし」の転。ある事を取り上げ、それを強める。多くは中世以後の会話文に用いられ、俗語的な語であった。現在一部方言で残っている。

天草版伊曽保物語に使用されている副詞

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、副詞の総数は、92を数えた。

情態副詞（47）

あまつさえ　ありありと　急ぎ　いつまでも　今更　却って　重ねて　嘗て　必ず
予（かね）て　悉（ことごと）く　殊更　定めて　強いて　次第に　暫く　すごすごと
既に　是非に　互いに　忽ち　度々（たびたび）　たんと　遂に　つらつら　兎に角
ともかくも　なかんずく　何故に　始めて　偏に　再び　先ず　又　無下に　専ら
漸（ようよ）う　より　手づから　流石に　とっと　偶々（たまたま）　中々
はたと　折しも　ほとほと　ややもすれば

程度副詞（33）

遍（あまね）く　或いは　いかに　如何に　いと　いとど　大きに　おめおめ
かっぱと　結句　さして　扨（さ）て　散々に　然々（しかじか）と　実に　熟と
所詮　暫し　少し　総じて　聰て　総別　別して　別に　真に　尤も　殊に
そっと　やや　すっかり　殊の外　そろそろ　況（ま）して

陳述副詞（12）

未だ　更に　少しも　せめて　ただ　仮令　猶　願わくは　苦し　固より
強（あなが）ちに　迚（とて）も

天草版伊曽保物語に使用されている接続詞

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、接続詞の総数は、14を数えた。

かうして　さて　然らば　即ち　但し　で　では　なれば　因って　斯くて　同じく
に対して　されば　乍ら

天草版伊曽保物語に使用されている連体詞

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、連体詞の総数は、２を数えた。

或る　何たる

天草版伊曽保物語に使用されている感嘆詞

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、感嘆詞の総数は、５を数えた。

あら　いざ　したり　やあ　やれ

天草版伊曽保物語に使用されている疑問詞

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、疑問詞の総数は、２を数えた。

か　可

天草版伊曽保物語に使用されている接頭語・接尾語

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、接頭語・接尾語の総数は、７を数えた。

相　打ち　大　毎　連れ　な　丸

天草版伊曽保物語に使用されている連語

天草版伊曽保物語で使われている語彙の中で、連語の総数は、１を数えた。

ものかわ

まとめ

今回天草版伊曽保物語を深く探ってみて、学術的に素晴らしい作品であること。又天草版伊曽保物語は口語体の文章がポルトガル語式のローマ字で書かれていることから、室町時代の日本語の話し言葉や発音を知る上でも貴重な資料であること。この二つのことを改めて確認できた。

天草版伊曽保物語の語彙の変化について14項目にわたって細かく考察した。その結果として語彙の変化する言葉と語彙の変化をしない言葉があること。語彙の変化する言葉は動詞で、主として事物の動作・作用・存在を表し、時の経過に伴ってその内容の変わる語句である。語彙の変化をしない言葉としては、名詞、形容詞、形容動詞、副詞等の動詞以外の語句で、語形の変化は見られない。中でも名詞については、天草版伊曽保物語で使用されている語彙が最も多く、次に多い動詞の約２

倍に達する。名詞は生活の基本語彙の大半を示すものであり、現代でも生活の基本語彙として使われている。逆に使われなくなった語彙について考えてみると、武具に関するもの、仏教用語に関するもの、登場人物の服装に関するもの、身分に関するものなどがあげられる。文化、芸術、思想など物の考え方が変わり、社会が変わってきた中で言葉は生まれてきたし、生活に関わりの少なくなった新語など、廃れて使われなくなった語彙は多い。つまり生活に密着した基本語彙は、どんなに時代が変わろうとも変化しないのである。今後機会あるごとにこの作品の良さを紹介したい。

引用文献

１）新村　出訳.（1939）. *天草版伊曽保物語*：岩波文庫 岩波書店. P1-114.

２）浜名志松.（1983）. *五足の靴と熊本・天草*：国書刊行会. P106-110.

３）秋山正次・吉岡泰夫.（1991）. *熊本の方言*：熊本日日新聞社. P161-235.

４）熊本県高等学校社会科研究会編.（1993）. *新版熊本県の歴史散歩　新全国歴史散歩シリーズ43*：山川出版社. P169-194.

使用した辞典

１）中村幸彦・岡見正雄・阪倉厚義.（1999）. *古語大辞典*：角川書店.

２）松村　明・山口明穂・和田利政.（2008）. *古語辞典*：旺文社.

３）日本大辞典刊行会.（1972）. *日本国語大辞典*：小学館.

４）尚学図書.（1981）. *国語大辞典*：小学館.

５）諸橋轍次・鎌田　正・米山寅太郎.（1981）. *広漢和辞典*：大修館書店.

参考文献

天草版伊曽保物語（Esopono Fabvlas）【https://textdb01.ninjal.ac.jp/dataset/amis/】
（1593年刊）公開日 2019年３月25日 国立国語研究所